



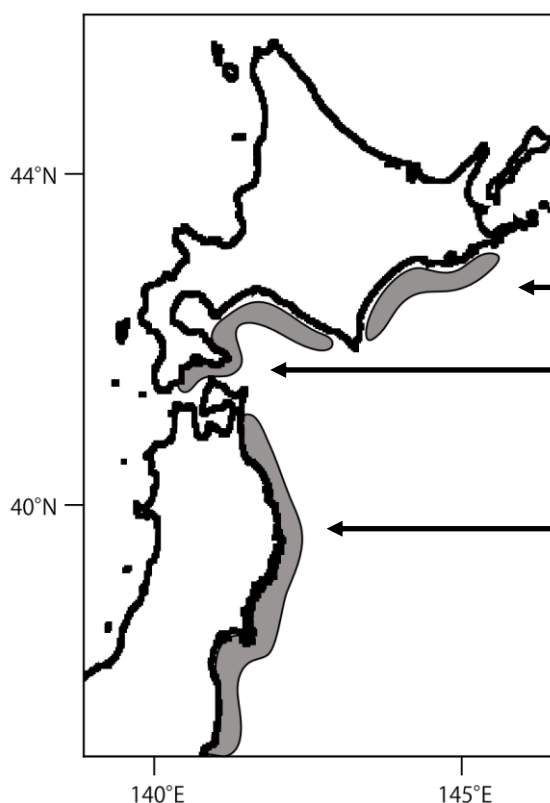
2023年7月31日

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2023年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2023年8月～9月)のポイント



常磐～三陸海域および津軽海峡～道南太平洋海域の
スルメイカの来遊量は前年並、道東太平洋海域では
前年を下回る。

道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年並。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年並。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門（横浜） 上原

浮魚資源部（横浜） 大島、松井

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/>

2023 年度 第 1 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2023年8月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2023年級群）

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

（1）来遊量：前年並。

（2）漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

（1）来遊量：前年並。

（2）漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

（1）来遊量：前年を下回る。

（2）漁期・漁場：来遊時期は前年より遅い。また、漁場形成は散発的で、明瞭な主漁期は無い。

※ 調査で漁獲されたスルメイカが非常に少なく、魚体サイズに関する情報が極めて限定的であるため、魚体の予報は取りやめとした。

I 予報の説明

2023年5月下旬～7月上旬に実施した太平洋及び日本海のスルメイカ漁場一斉調査と日本海スルメイカ北上期調査¹⁾の結果(図1～3;以降、上記調査をいか釣り調査と総称する)、および5月～7月までの漁況経過(表1)を主要な情報として8月～9月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、常磐～三陸海域および津軽海峡～道南太平洋海域は前年並、道東太平洋海域では前年を下回ると予測される。なお、前年8月～9月の漁獲量は、常磐～三陸海域では近年5年(2018年～2022年)平均を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域では近年5年平均並、道東太平洋海域では近年5年平均を上回っていた。

¹⁾ 北海道立総合研究機構函館水産試験場が独自に実施。

1. 常磐～三陸海域(いか釣り、底びき網、定置網、まき網)

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れを主体に、津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが一部含まれると考えられる。三陸周辺海域(41°N以南、143°E以西)におけるいか釣り調査でのCPUE(いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数)は、漁獲が無かったため前年を下回った。一方、各地域における6月(一部7月上旬²⁻⁴⁾までの漁法別の水揚げ量や小型いか釣り漁船CPUE(1日1隻当たり漁獲量)は、前年を上回っていた場合が多かった。以上のことから、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年並と予測される。6月中旬～7月上旬に日本海の津軽海峡西口周辺海域(39°N～42°N、138°E～140°E)で実施されたいか釣り調査でのCPUEは前年に引き続き非常に低い水準で推移したため、日本海由来の来遊量は前年並に低い水準になると予測される。以上の調査結果、およびこれまでの漁況の経過から、常磐～三陸海域への来遊量は前年並と予測される(前年の漁獲量は近年5年平均を下回った)。

²⁾ 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計。

³⁾ 岩手大漁ナビ(<https://www.suigi.pref.iwate.jp/>)による市況データを基に集計。

⁴⁾ みやぎ水産NAVI(https://suisan-navi.pref.miyagi.jp/mizuage_top)による水揚げデータを基に集計。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域(いか釣り、定置網)

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れと津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが含まれると考えられる。津軽海峡東口周辺海域(41°N以北、143°E以西)におけるいか釣り調査CPUEは前年を下回った。6月に函館港に水揚げした小型いか釣り漁船CPUEは前年並であった。一方、「1. 常磐～三陸海域」で記述した通り、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年並、日本海由来の来遊量は前年並と予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並と予測される(前年の漁獲量は近年5年平均並)。

3. 道東太平洋海域(いか釣り、底びき網)

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合域を北上する群れと考えられる。沖合域(143°E以东)におけるいか釣り調査CPUEは前年を下回った。また、親潮第1分枝の張り出しは平年並～かなり北偏で推移するが⁵⁾、道東沿岸域の水温は前年より低くなると予測されている(図4、水産研究・教育機構の海況予測システムFRA-ROMSII⁶⁾)。このことから、道東沿岸域への来遊の条件は前年より悪いと考えられる。以上のことから、道東太平洋へのスルメイカの来遊量は前年を下回ると予測される(前年の漁獲量は近年5年平均を上回った)。来遊時期は昨年よりも遅く、調査CPUEは過去の推移の中でも低い水準にあることから、漁場形成は散発的で、明瞭な主漁期はないと予測される。

⁵⁾ 2023年度第3回東北海区海況予報(https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2023/20230728_tohoku/index.html)

⁶⁾ 国立研究開発法人 水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム(<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/index.html>)

Ⅱ 調査結果

1. 太平洋第1次スルメイカ漁場一斉調査

5月下旬～6月下旬に太平洋で実施されたいか釣り調査の結果、全53調査点のうち有漁点は僅か2点であった（昨年は全53調査点のうち有漁点は5点）。調査海域全体の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.002尾であり、前年を下回った（0.02尾、前年比10%）（図1、2）。海域別にみると、三陸周辺海域では0尾であり、前年を下回った（0.01尾、前年比0%）。津軽海峡～道南太平洋海域では全6調査点のうち有漁点は1点のみで平均CPUEは0.01尾であり、前年を下回った（0.02尾、前年比29%）。沖合域では0.001尾と前年を下回り（0.02尾、前年比8%）、調査海域全体の有漁点割合も前年を下回った（本年4%、前年9%）。以上のように、全海域において平均CPUEは前年を下回り、極めて低い水準で推移していた。

津軽海峡～道南太平洋海域で17cm、沖合域で12cmのスルメイカが1尾漁獲された。ただし、どちらの海域も漁獲尾数が1尾のため、漁獲物の外套背長組成について前年と比較はできない（図3）。

2. 日本海スルメイカ漁場一斉調査（2023年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報の結果より引用・改編）

6月中旬～7月上旬に津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）で実施されたいか釣り調査の結果、平均CPUEは0.57尾であり、前年（0.16尾）を上回った。ただし、2019年以降現在にかけての平均CPUEは、それ以前と比較して非常に低い水準で推移していた（例えば、2010年～2018年平均は11.17尾であったのに対し、2019年～2023年平均は0.81尾）。

3. 移行域幼稚魚調査（参考情報として掲載）

5月上旬～6月上旬に常磐～三陸沖の太平洋で実施された表層トロールネットによる調査の結果、外套背長10cm未満のスルメイカの平均CPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）は1.1尾で、前年（2.7尾）を下回った（図5）。また、全調査点のうち有漁点の割合は29%であり、前年（38%）を下回った。漁獲物の外套背長組成は3～5cmの割合が高く、前年（1～4cm）より大型であった（図6）。本調査で採集された群れは、本予報期間後半に漁場へ来遊する可能性があるが、CPUEは前年を下回っており（前年比40%）、漁場への来遊の寄与としては大きくないと考えられる。

Ⅲ 各海域の漁況経過

2007年～2015年の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2022年は1.3万トンであった（図7）。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域および道東太平洋海域に区分される。太平洋海域での2022年8月～9月の漁獲量（生鮮）は5.4千トンであり、そのうち常磐～三陸海域では3.3千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では1.4千トン、道東太平洋海域では0.7千トンであった（図8）。近年5年（2018年～2022年）平均比は、常磐～三陸海域では65%、津軽海峡～道南太平洋海域では104%、道東太平洋海域では210%であった。なお、根室海峡～オホーツク海と千葉県以南の海域の漁獲量はそれぞれ16トンと43トンであった。

2023年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚量²⁾（生鮮：速報値、一部未集計）は526トンで、前年（319トン）を上回った。常磐～三陸海域の主要港では491トンで、前年（227トン）を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では21トンで、前年（51トン）を下回った。千葉県以南では14トンで、前年（39トン）を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

¹⁾ 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため図7、図8を含めた漁獲量は全て推定値。

²⁾ 水揚量は単純積み上げた数値。

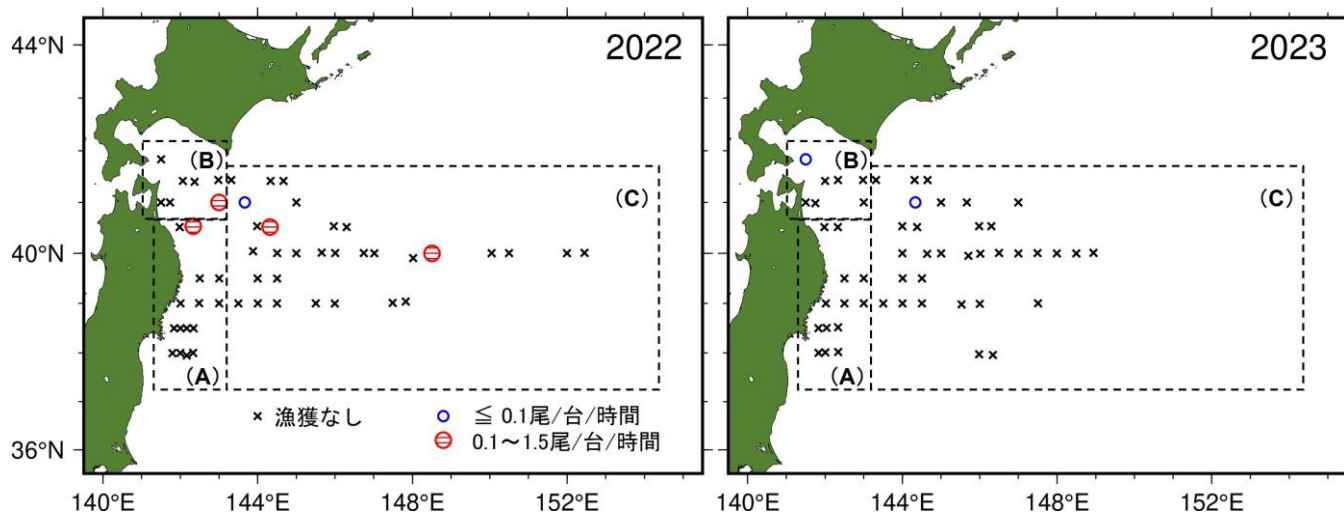


図1. 2022年、2023年5月下旬～6月下旬の太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

⊖は0.1～1.5尾/台/時間、○は0.1尾/台/時間以下の有漁点、×は漁獲無しを表す。
破線で囲まれた海域は（A）三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）
沖合域を示す

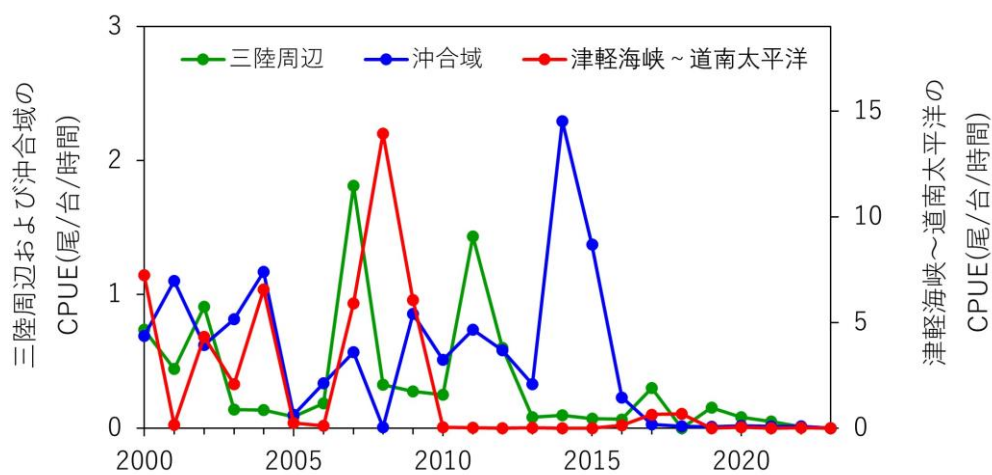


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

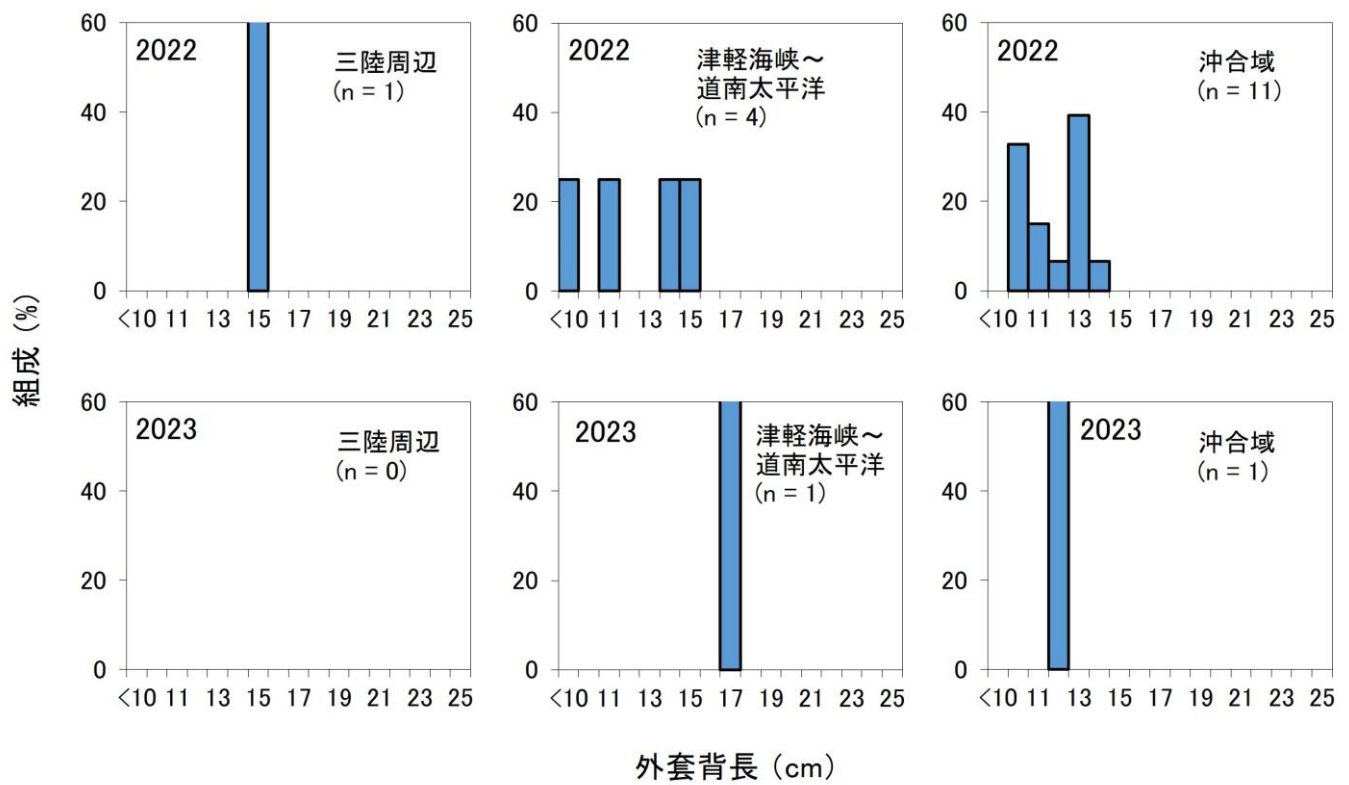


図3. 太平洋におけるいか釣り調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋海域・沖縄域）で採集されたスルメイカの外套背長組成
各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している
nは測定尾数を示す

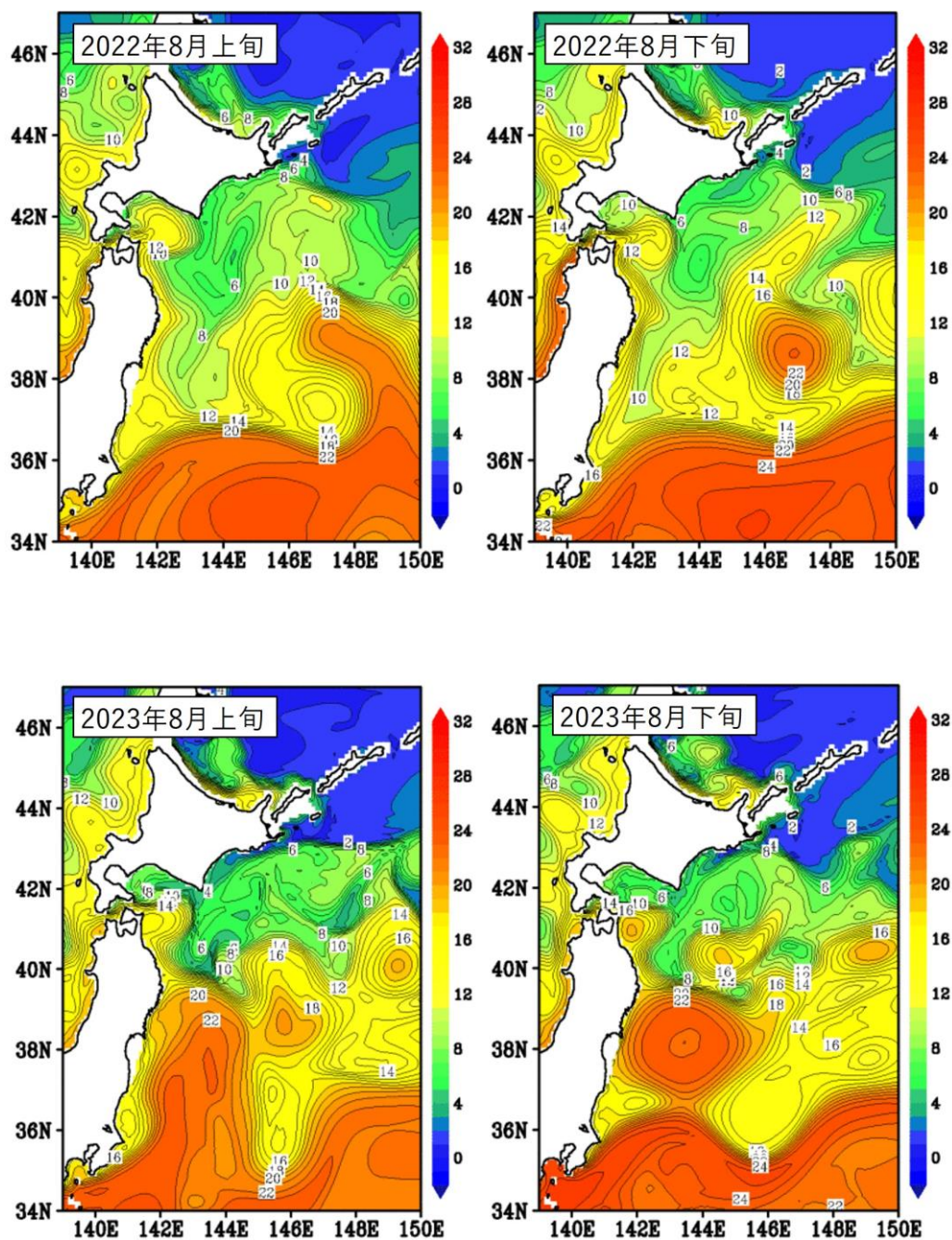


図4. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2022年、2023年の8月上旬と下旬の深度50mにおける水温

2023年は予測水温であり、2023年7月26日にHPより取得した
 深度50mはスルメイカの代表的な分布深度

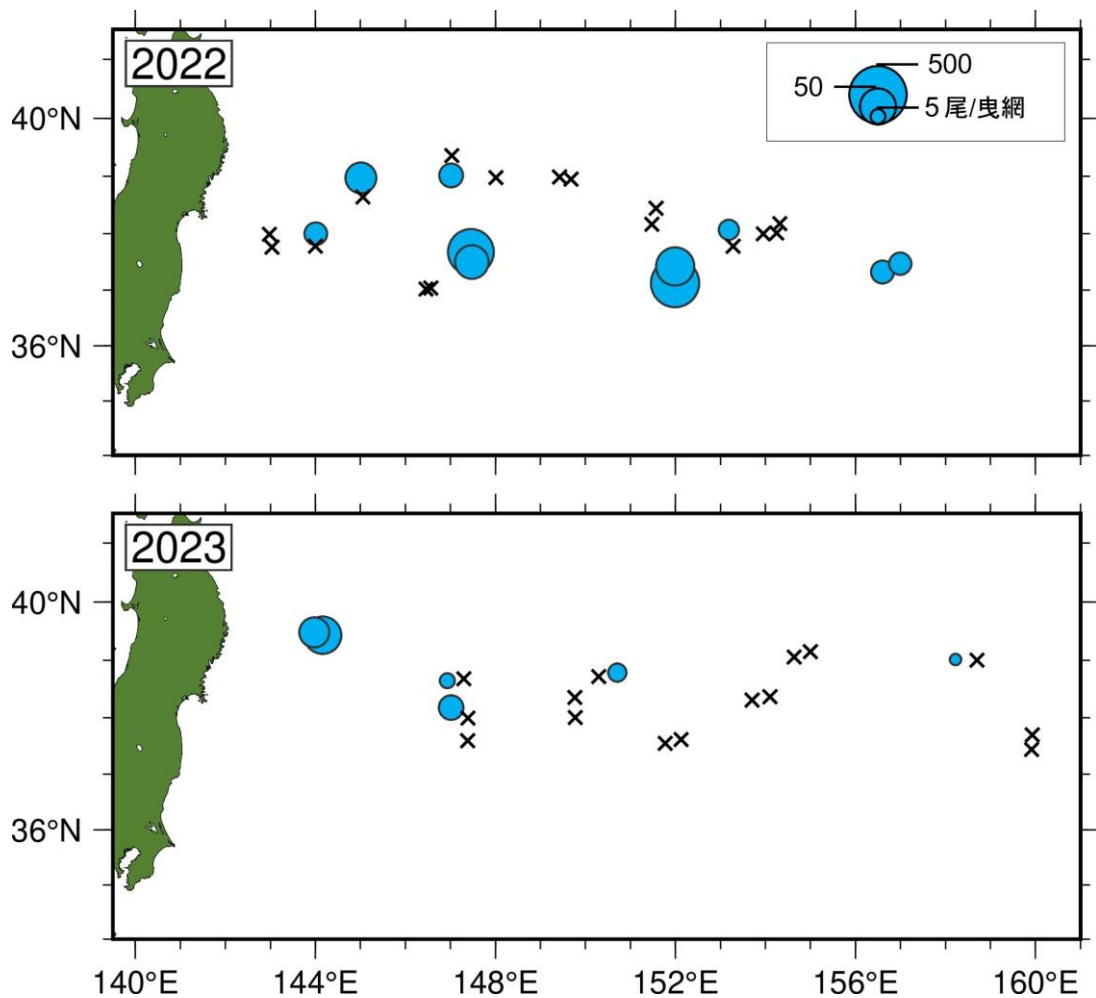


図5. 2022年、2023年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査によるスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布
×は漁獲が無かった点を示す

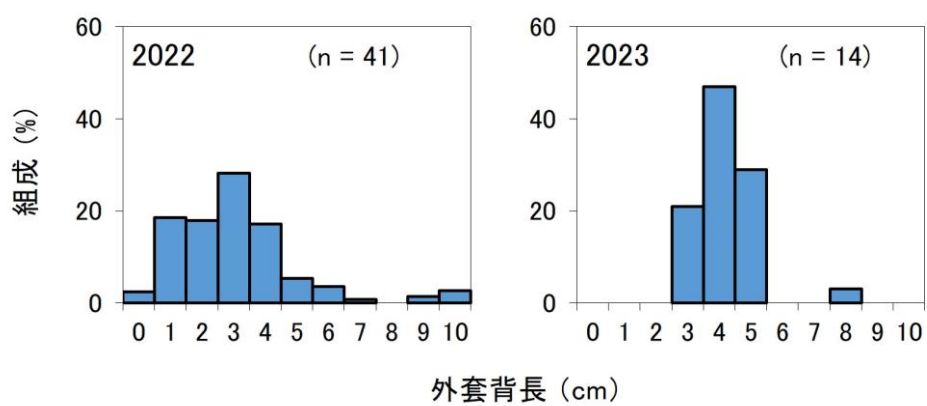


図6. 2022年、2023年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査で採集されたスルメイカの外套背長組成

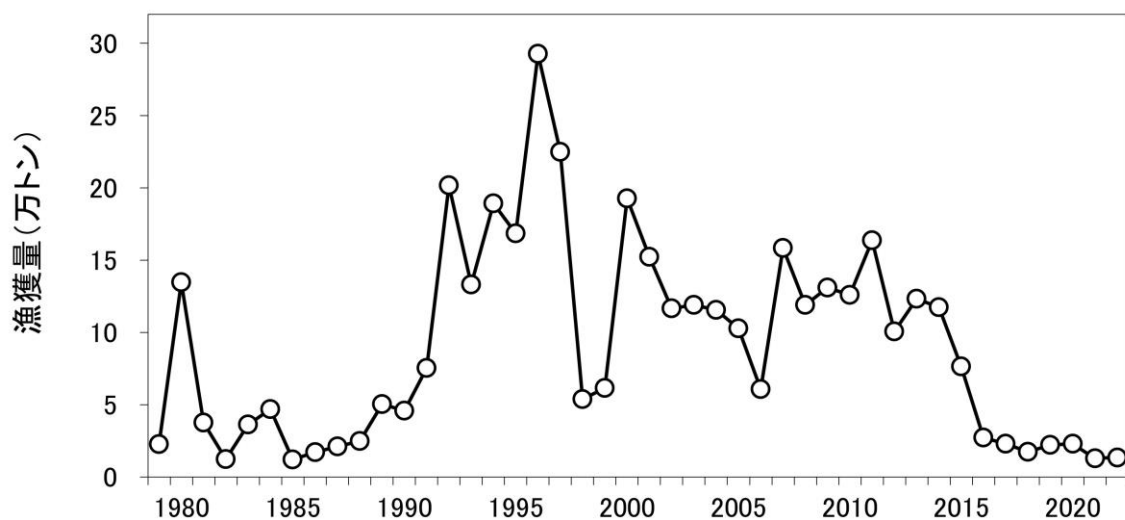


図7. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの漁獲量（全漁業の暦年集計）の年推移

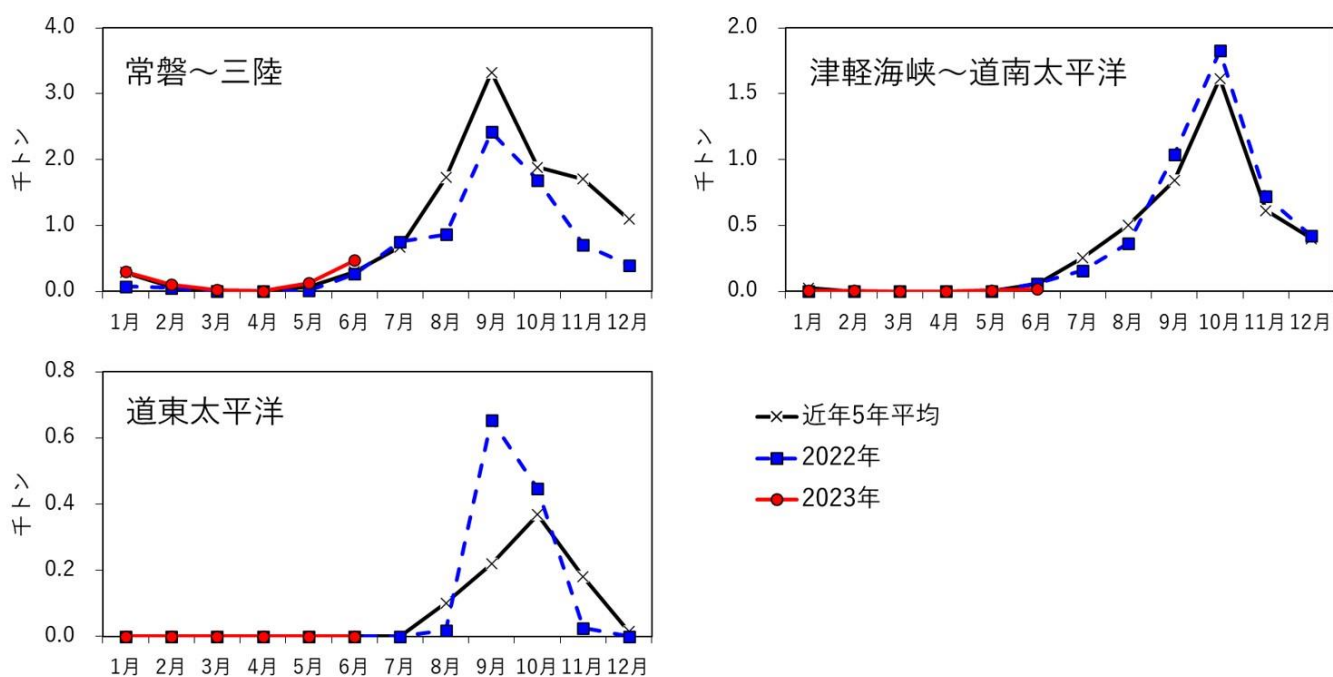


図8. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）

近年5年平均は2018年～2022年の平均

（いか釣り・底びき網・定置網・まき網）

表1. 漁況経過（2023年5月～7月、一部未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	7月24日の時点で初水揚げはまだない（前年は8月12日に花咲で釣りによる初水揚げがあった）。
北海道 道南	6月の函館港への釣りによる水揚量は13トンであった（前年は12トン）。CPUEは前年比91%であった。また、漁業情報サービスセンターのスルメイカ漁況・市況情報によると、7月上旬の水揚量は7トンであった（前年は15トン）。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚量は29トン（前年は16トン）、CPUEは前年比76.1%であった。6月の大畑港への釣りによる水揚量は480 kg（前年は520 kg）、CPUEは前年比82.1%であった。6月の八戸港への釣りによる水揚量は355 kg（前年は水揚げ無し）、底びき網による水揚量は94トンであった（前年は67トン）。
岩手	6月の主要7港への釣りによる水揚げは5.2トンであった（前年は水揚げ無し）。底びき網による水揚量は11 kg（前年は204 kg）、定置網による水揚量は74トンだった（前年は31トン）。また、いわて大漁ナビの市況データによると、7月上旬の定置網の水揚量は13トン（前年は6トン）、釣りによる水揚げ量は8トン（前年は4トン）であった。
宮城	6月の主要10港への底びき網による水揚量は144トンであった（前年は74トン）。定置網による水揚量は13トンであった（前年は13トン）。釣りによる水揚量は5 kgであった（前年は5 kg）。また、みやぎ水産NAVIの水揚げデータによると、7月上旬の石巻港への底びき網による水揚量は11トンであった（前年は21トン）。
福島	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚量は16トン（前年は13トン）、小型底びき網による水揚量は0.5トンであった（前年は1.4トン）。
茨城	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚量は1.5トン（前年は2.6トン）、小型底びき網による水揚量は1.3トンであった（前年は1.7トン）。
千葉	5月～6月の主要3港への定置網による水揚量は0.3トン（前年は2.1トン）、釣りによる水揚げは0.4 kgであった（前年は水揚げ無し）。
神奈川	5月～6月の主要2港への定置網による水揚量は83 kgであった（前年は78 kg）。
静岡	6月の仁科浜港への釣りによる水揚量は4.5 kgであった（前年は31 kg）。
三重	5月～6月の奈屋浦港への中型まき網による水揚量は0.4トン（前年は24トン）、主要2港への定置網による水揚量は37 kgであった（前年は267 kg）。
和歌山	6月のすさみ港への釣りによる水揚げはなかった（前年は6 kg）。
高知	5月～6月の主要2港への定置網による水揚げは0.4トンであった（前年は11トン）。

注：CPUEは1日1隻当たりの漁獲量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	静岡県水産・海洋技術研究所
	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産資源研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
茨城県水産試験場	
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	